

美とトランス・ミソジニー

—— 美の家父長制の乗り越えをめぐる

北九州市立大学 高木 駿

美が男性中心的な概念であることは、ジェンダー学、フェミニズム論、そして美学・哲学の、とりわけフェミニスト研究者によって批判されてきた。美しさは、男女の性的欲望に関わる権力構造のなかで、性的主体としての男性によって、客体としての女性の身体に担わされてきた概念である。C. コースマイヤーは、そのようないわば欲望の美を E. バークの理論のうちに指摘するだけでなく、欲望や欲求を「無関心」概念によって克服し、純粋な美を確立したとされる I. カントの理論にさえ、男女、つまりジェンダーの非対称的な権力構造が反映されているのではないかと疑問符を突きつけた (Korsmeyer 2004)。本発表ではまず、コースマイヤーの問題提起を受け止め、特にカントの『判断力批判』(1790) の分析を通じて、「美の家父長制」とでも呼べるセクシズムに根差した構造が近代美学理論のうちに存在することを確認する。

ところで、家父長制は、ジェンダーの規律と秩序を維持するために、ミソジニーの発動を構造的に要求する (Manne 2018)。美の家父長制においては、美しさは権力の客体である女性の規範となり、この規範を逸脱し、秩序を乱す者は、蔑視や中傷でもって処罰される。この意味で美しさはミソジニーを内包する。こうした構造を近代美学は理論的に支持してしまうのである。

果たして、美学は、美の家父長制およびセクシズムを乗り越えることができるのだろうか。この問いを考えるにあたり、美しさとジェンダーをめぐるフェミニストの研究、例えば、崇高さや醜さに女性を結びつけ、美しくない女性像を呈示するフェミニスト・アートの研究 (Robinson 2015) や、美容行為の有害性・従属性を暴露し、美しさの放棄を促す美容の研究 (Jeffreys 2015) を援用することは有効であろう。しかし、そうした試みのなかにはトランスジェンダーの女性を排除するものが存在する。トランスの女性の排除は、トランスの女性に対して発動されるトランス・ミソジニーの放置を意味するが、トランス・ミソジニーも、ジェンダー秩序の維持に関与する点 (Serano 2016) でミソジニーと同様の効果を発揮する。結果として、トランスの女性の排除は、美の家父長制の維持に貢献してしまうのである。

本発表は、まずカント美学をたよりに近代美学の美の家父長制およびセクシズムを確認し、次に美学が美の家父長制を乗り越える方法を吟味する。そのなかで、トランスの女性を排除する点でトランス・ミソジニーの発動を許容する方法が有害であることを明らかにし、逆説的に、美の家父長制の乗り越えにはトランスの女性の包摂が不可欠であることを示す。